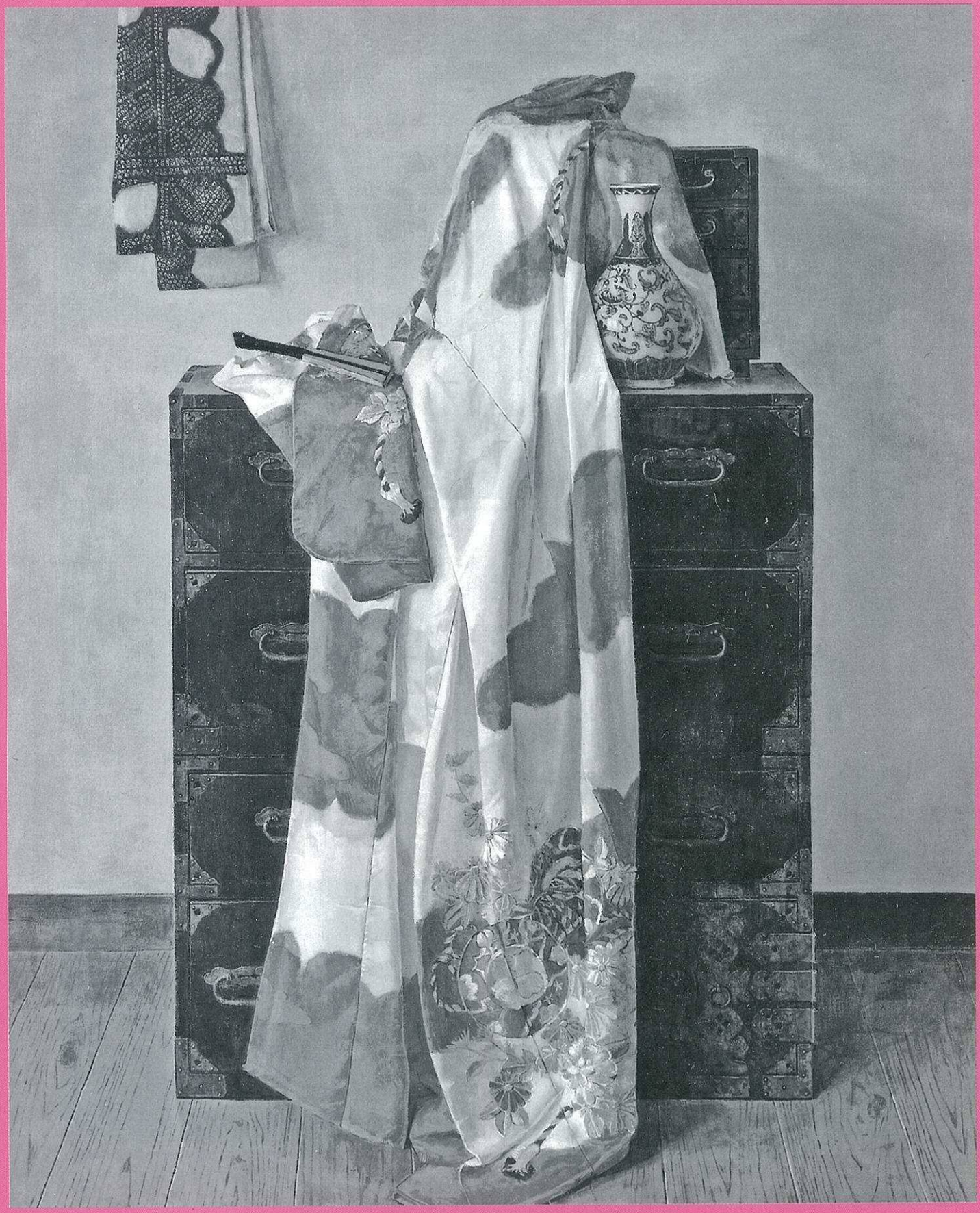
瀬戸内市の歴史を受け継ぐ文化・芸術の会報誌

ゆう

瀬戸内市文化協会
平成27年2月20日発行
第11号



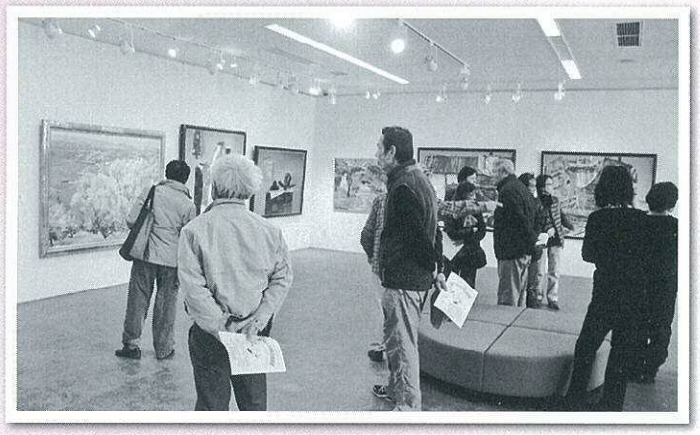
第45回日展（2013）出品作品　　赤い打ち掛け　　奥田利勝

竹久夢二生誕130年記念
瀬戸内市文化協会設立10周年記念

「瀬戸内市文化協会絵画展」

――日本のエーゲ海　光と風――を開催

標記の絵画展を瀬戸内市立美術館3階ギャラリーSで去る12月5日（金）から14日（日）の9日間開催しました。

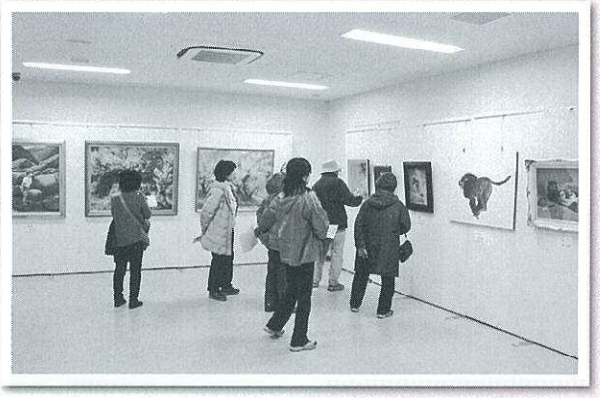


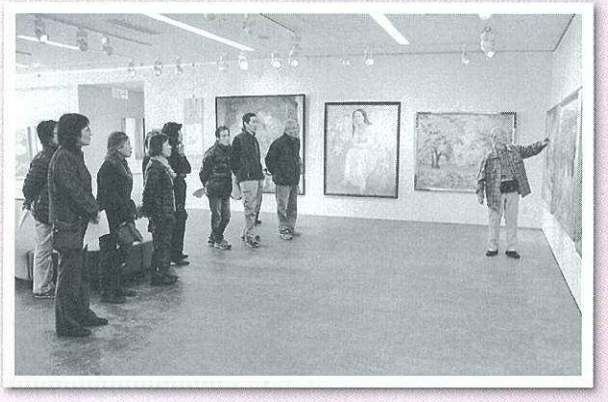
作品の出品者は日展・県展等で活躍している文化協会絵画部員12名の作品で、それぞれ大小合わせて34点（水墨画2点・俳画1点・日本画10点・洋画21点）の作品を展示しました。

絵画展の開催時期が年末の年の瀬も押し迫った12月の開催であったにも関わらず、開催期間中488名もの多数の方にご入場いただき、それぞれの作品を熱心に鑑賞していただきました。

また、会場に展示作品の批評、感想、意見等を自由に記入していただくための、メモ帳を備えておきましたところ、作品に対する高い評価、身近なモチーフに対する親近感、絵画展の度々開催希望等、主催者としては大変うれしい感想や、貴重なご意見をたくさんいただくことができました。これは次回の絵画展開催の参考にさせていただきたいと思います。

絵画部　（小林　直明）





ギャラリートーク

竹久夢二生誕１３０年記念

――竹久夢二生誕１３０年を迎えて――

瀬戸内市邑久町本庄に竹久夢二（本名茂次郎）が生まれてから今年は１３０年目を迎える。ふるさとが夢二に与えた影響は大変大きく、その自然や文化は夢二の感性を豊かに育み、家族に愛されて過ごした少年時代の思い出は大切なものとして郷愁の想いとなり、終生その郷愁を抱き続けながら描いた作品は時代を超えて人の心をつかむ。

夢二式と称された美人画は単に美しい女性を描いたのではなく、社会的にまだ弱い立場だった女性に共感を寄せてその心を描き出し、庶民の中にいてその一人として哀歓を率直に表現したものである。大変なこども好きで三人の息子の父親だった夢二はこどもたちも多く描き、また子どもへ向けた本も多くのこしている。イラストレーターやデザイナーとしては柔軟で鋭い直観力をもって生活の中に美を見出し、今でも新鮮味をもってその魅力を放つ。夢二は心の詩を表現し続け、そこに普遍的な人の心の真実やあたたかみがあるということがその魅力の源ではないかと思う。

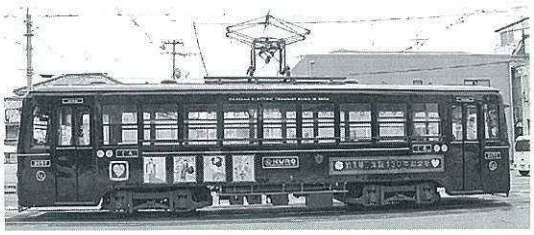
夢二郷土美術館は、昭和26年に夢二の作品と出会った松田基が数えの16歳で岡山を離れた夢二の里がえりを念じ、作品を蒐集して１９６６年に「郷土」と冠した美術館である。松田はその魅力を「夢二の前に夢二なし、夢二の後に夢二なし」と語った。

この想いを継ぎつつ記念イヤーである今年は、本館で開催した夢二が愛したというシリーズでの連続３回の企画展や、生家で地元の方の協力を大いにいただいたイベント、８月末から始まった京都、岡山、日本橋、横浜の髙島屋で開催されたベルエポックを生きた夢二とロートレックというテーマの記念巡回展などを通して、新しい夢二の魅力を感じていただけたらありがたいと思う。さらに瀬戸内市では市長を中心に竹久夢二生誕１３０年記念事業瀬戸内市連絡会が発足し、ふるさとから夢二を盛り上げていただいたことは心強く、大変感謝している。

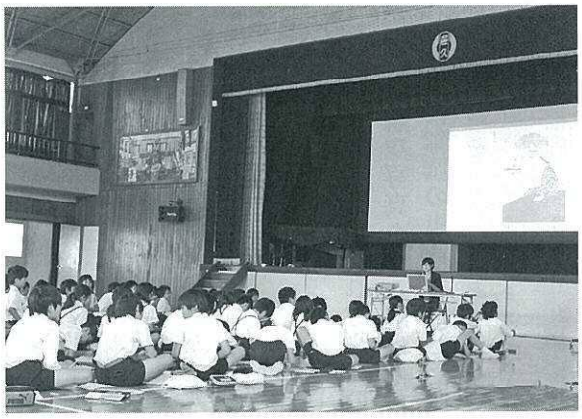
３年前から邑久小学校で出張授業をさせていただく機会を得て、毎年５年生のこどもたちが一生懸命書いてくださった「こども夢二新聞」を当館で展示させていただいている。当館の使命のひとつは次世代へ夢二を伝えていくことであり、その中でもふるさとのこどもたちに夢二を知っていただくことは大変意義深いことである。

４年前から取り組みを始めた「こども夢二新聞」や三期目を迎える「こども学芸員」などの教育普及活動にさらに力を入れていきたい。また、今年９月には夢二学会も設立され、さらに研究が深まっていくことが期待されている。今後もふるさと岡山から竹久夢二を発信していきたいと思う。

夢二郷土美術館 館長代理
（小嶋　ひろみ）
（平成26年11月執筆）


夢二生誕 130 年記念　夢二 KURO 電車　岡山電気軌道

夢二の描いた着物を手描き友禅で特別製作


邑久小学校　出張授業

夢二の母の里の椿　記念植樹式

瀬戸内市の歴史探訪

―商都備前福岡の賑わいを今に伝える―「一遍上人絵伝」

中世のころ「山陽道第1級の都会」として栄えた備前福岡。その繁栄を今に伝えるものが、国宝一遍上人絵伝です。時宗（じしゅう）の教祖である一遍上人は、1278年にこの地を訪れ説法しました。この絵伝は一遍の偉業を伝え残すために、一遍の死後まもなく弟子聖戒と絵師圓伊がもう一度巡錫の地をたどって、10年目で全12巻を完成させたものです。今でいう報道写真のごとく、精密に描かれ、当時の様子が忠実に再現されています。中世の市場の様子を知る貴重な資料として、全国の歴史教科書や資料集に必ずといっていいほど登場しています。

瀬戸内市長船町福岡にある「備前福岡郷土館」（毎週日曜日午前10時から午後3時開館）には、この「一遍聖絵『福岡の市』デジタルミュージアム」があり、細部にわたるデジタル画像として大画面で見ることができます。

福岡の市跡

（国立国会図書館ウェヴサイトより）　一遍上人絵伝

以下、概略説明です。

（デジタルミュージアム概要より抜粋）

一枚の絵「国宝一遍上人絵伝『福岡の市』」をもとに、今から700有余年前の鎌倉時代にタイムスリップしてみましょう。

平安末期に一つの大きな社会的枠組みである律令制が崩れ、武家と庶民の時代が始まります。地域や庶民間の活発な物の動きを引き起こす「商業」（貨幣経済）が日本で初めて生み出された頃の「中世社会」をこの絵から覗くことができるのです。衣食住から見てみましょう。衣（一遍の着衣・網衣、足半、胴丸、烏帽子、剃髪・髪、履き物）食（魚、米、食物屋）住（草葺屋根、板葺屋根、鰹木のルーツ）、その他備前焼、風俗（女性躍進、刀剣とその差し方）や、貧富の拡大等をよく観察すれば、当時の世の中全体が見えてくるのです。

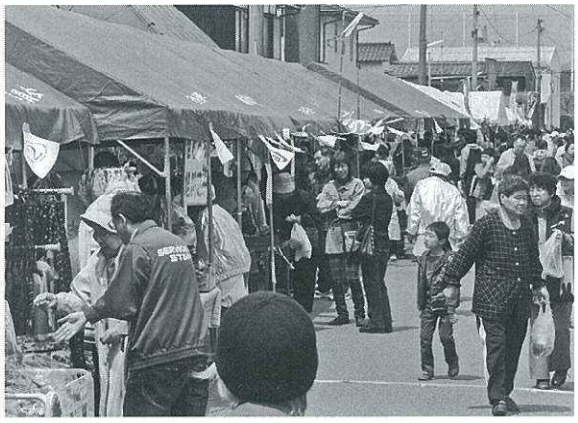
当時の福岡はどこにあったのでしょうか。聖絵の舟の描かれ方やこの地域一帯の航空写真を読み解けば、当時吉井川は福岡の東側を流れており、福岡の市はその西岸にあったと、ある程度予測がつくのです。

現在の福岡は、2009年に国土交通省の「夢街道ルネサンス」に認定され、また瀬戸内市の景観形成重点地域に認定されています。また、2006年には現代版「備前福岡の市」が、毎月第4日曜日定期市として復活しました。4月と11月の市は、「備前福岡の大市」として、地域をあげて取り組むなど、歴史の舞台に再び登場しようとしています。

NHK大河ドラマ「軍師官兵衛」の影響もあり、多くの観光客が訪れ、地元の方々によりおもてなしされている備前福岡。その魅力は、まだまだ多岐にわたっています。是非一度、備前福岡にお越し下さい。

瀬戸内市観光協会副会長
長船町観光協会会長（大倉　秀千代）

（平成26年11月執筆）


4月と11月の備前福岡の大市